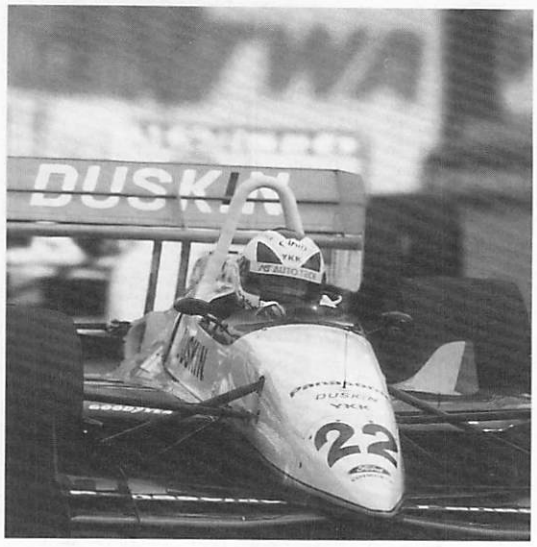
時速三七〇キロの光芒

すべて順風満帆に
きたわけじゃないけれど、
自分の生き方に満足していますから。

INDIE CAR RACER

松下弘幸

【HIRO MATSUSHITA】



インディカーシリーズが始まったのは、今から八十五年前の一九〇九年。以来、アメリカではアメリカンフットボール、プロ野球、バスケットボールと肩を並べる人気スポーツとして注目を集めており、F1の人気をはるかに上回っている。年間の観客動員数は三百万人を超えるほどだ。

しかし、日本ではF1に比べるとまだまだ情報量が少ないのでインディカーレースの存在は知っていても、その実態について知る人は少ないのではないだろうか。

実は日本でも非選手権としてだが、二十八年前に一度だけレースが開催されたことがある。その後、日本再開催のメドはたっていないが、ここ数年で着実にインディカーへの関心は高まっている。九十四年にインディカーシリーズにホンダが参戦したのを始め、今年はトヨタが参戦することになった。もしかすると、近い将来、日本再開催の日がやってくるかも知れない。

現在、日本人のインディカーレーサーは二人。日本人で初めてその世界に足を踏み入れたのがヒロ松下さんだ。「スタートしたら最後までやりぬかないといけない。とにかくタフなスポーツですよ」

と淡々と言う彼は、一九九〇年にデビューして以来、十六戦中十五戦完走というすばらしい成績を残している。

彼のデビュー戦となった"インディ五〇〇"というのは、インディカーシリーズの中でも最大級のレース。これはオーバルコースと呼ばれる一周二・五マイルの単純な楕円形のコースを三時間で二百周も走るというもの。最高速度はなんと時速三七〇キロにも達する（ちなみにF1の最高速度は三二〇キロ）

―私たちにはとうてい想像もつかない。

そんな世界にいるヒロさんも、かつては普通のサラリーマン生活を送っていたことがあった。大学を卒業してからの三年間は、祖父である故松下幸之助氏が築きあげた松下電器で販売促進などの仕事をしていたという。

「大学を卒業して、すぐにレーサーの道に入ってしまうと、その世界しか知らない人間になってしまうと思ったんです」

でも、大学卒業後すぐにアメリカに渡ればもっと早くインディカーレーサーとして成功したのでは。

「確かにそうかも知れません。でも、あの三年間に得たことはたくさんあります。結果的にはマイナスよりプラスになったことの方が多いですよ」

そう言う彼は今、レーサー以外に不動産会社とレースカーを中心としたエンジニアリングサービス会社の経営者の顔を持つ。サラリーマン生活で得たノウハウを生かしてのことだ。

今はレーサーとしても、経営者としても成功をおさめている。が、アメリカへ渡る時には何の保証もなかった。日本にいれば安定した生活があるのに、危険なレーサーの道を選ぶのに不安はなかったのだろうか。

「確かに、レーサーというのは危険な職業ではあるけれど、一般の人が思っているほど危険なものじゃない。普通に道を歩いていても事故に遭うことがあるでしょ。それと一緒ですよ」

そう言われても、私にはイマイチ納得できない。

彼がモータースポーツに触れ、その楽しさを知ったのは十五歳の時だという。その時はモトクロスであったが、十八で免許を取ってから四輪に転向。その後ラリーを中心に活動し、ダートトライアルでは関西チャンピオンにも輝いた。大学卒業の頃にはいくつかのチームからプロにならないかという声がかかったそうだ。

F1レーサーの道は考えなかったのかという問いに彼はこう答えた。

「初めは絶対にインディカーレーサーになろうと決めていたわけじゃないんです。でも今はインディカーレーサーになってよかったと思っています」　というのは。

「インディカーレースはファンとレーサーとの距離がすごく近いんです。例えば日本で開催されるF1だと、ファンがパドック（出場車両を整備点検する駐車区域）に入って、ドライバーと話をしたり、握手したりすることってまずないですよね。でも、インディカーは違うんです。一般のファンがどんどんパドックに入ってくる。そして、握手したり、写真を撮ったり。アメリカではパドックパスが千円くらいで買えますから。大人から子供まで誰もが気軽にドライバーに接することができるんです」

なるほど。レーサーにとってもファンと直接言葉をかわすことは、次のレースへの活性剤になるのだろう。

「でも、レースというのはドライバー一人が頑張って勝てるものじゃないんです。メカニックと、レーサーが一つになってこそ初めて勝てる。だから、ドライバーとして自分のおかれた立場を百パーセント生かし、時にはみんなを引っ張っていったりして、いい成績を残すパーセンテージをあげていく。何よりチームワークが大切です」

アメリカのレース社会はコミュニケーションなしでは語れないようだ。

最後に、生まれ変わるとしたらまた同じ道をたどりますかと尋ねるとすぐに答えが返ってきた。

「ええ、もちろんです。すべて順風満帆にきたわけじゃないけれど、自分の生き方に満足していますから」と。

取材・文　中木　純
写真　塩川真悟

PROFILE

昭和三十六年生まれ。兵庫県西宮市出身。中学時代からモーターサイクルに興味を持つ。大学卒業後、松下電器に勤務。
一九八六年渡米、フォーミュラー・アトランティックのシリーズチャンピオンに。
一九八九年フォーミュラー・アトランティックのシリーズチャンピオンに。
一九九〇年日本人初のインディカーレーサーになる。
現在、カリフォルニアに在住。今はほとんどアメリカにいるが、いずれは1年間のうち三カ月くらいは日本に戻れるような生活がしたいとのこと。